

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	乙第 1184 号	氏名	中澤 英之
論文審査担当者	主査 田中 榮司 副査 中山 淳・宮川 眞一		

### (論文審査の結果の要旨)

セリアック病は遺伝的素因を背景にグルテンの経口摂取を契機に発症する小腸の炎症性疾患で、骨粗鬆症や悪性リンパ腫などを合併することが知られている。遺伝的背景の違いから国内には患者が存在しないとされ、疫学調査も実施されていない。本研究では、血清学的スクリーニング法を用いて本邦におけるセリアック病患者の疫学的検討を試みた。血液疾患や消化器病で当院受診歴のある患者 710 例と健常者 239 例を対象とし、凍結保存血清中の抗組織トランスグルタミナーゼ IgA 抗体(tTG-IgA)を ELISA 法によって測定した。tTG-IgA 陽性患者を対象として小腸粘膜の病理学的検討を行った。血清学的かつ病理学的にセリアック病が疑われた患者は診療録を用いてその臨床像を検討した。

その結果、中澤英之は以下の結論を得た。

1. 健常者群 239 例には tTG-IgA 陽性者を認めなかった。患者群 710 例中 20 例(2.8%)で血清 tTG-IgA が陽性だった。
2. tTG-IgA 陽性 20 例のうち 8 例は基礎疾患に悪性リンパ腫を有していた。そのうち 6 例は B 細胞リンパ腫、2 例は T 細胞リンパ腫だった。
3. tTG-IgA 陽性 20 例中 11 例で小腸粘膜病理の検討が可能であった。そのうち 7 例(患者群 710 例中 0.98%)に絨毛萎縮と粘膜内リンパ球浸潤を認め、セリアック病の病理診断基準である Marsh-Oberhuber grade3 相当の所見を認め、セリアック病である可能性が示唆された。
4. この 7 例は年齢中央値 54 歳(27-74 歳)で、6 例が男性だった。5 例が背景疾患として悪性リンパ腫を有していたが、セリアック病に多いとされる腸症型 T 細胞リンパ腫 (EATL) は含まれなかった。他の 2 例は Budd-Chiari 症候群と糖尿病性慢性腎不全の患者だった。
5. 7 例中 2 例において、グルテン制限食で改善する下痢症状を認めていた。明らかな家族歴を有する患者は認めなかった。

今回の研究は、血清学的スクリーニング検査によってセリアック病の疫学調査を試みた本邦で最初の研究である。欧米においてセリアック病の診断に用いられる tTG-IgA が陽性となる患者群が国内にも一定数存在することを明らかにし、さらに組織学的にもセリアック病が疑われる患者群の存在を発見した。今後の本邦における潜在的セリアック病患者の診断とその臨床像の解明につながると考えられる。さらに対象患者群 710 例中 0.98% というデータは、セリアック病に関する国内の新たなエビデンスになり得る。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。